

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0892100223		
法人名	社会福祉法人 新世会		
事業所名	グループホームいきり苑Ⅱ		
所在地	ひたちなか市磯崎町 4562-1		
自己評価作成日	2021年10月1日	評価結果市町村受理日	2022年1月26日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/08/index.php?action_kouhou_detail_022_kani=true&JkyosyoCd=0892100223-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 認知症ケア研究所
所在地	茨城県水戸市酒門町4637-2
訪問調査日	2021年11月28日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

コロナ禍でありながらも、地域で暮らすという視点は変わらずに力を入れています。現在地域の中いけていないことが現状ですが、利用者自ら地域のために役に立ったり子供たちのために何かをしたいという入居者の方々の存在が表出できるような関わりを支援しています。コロナ禍でも新しい地域の学校(小 中一貫校)散歩に行ったり新しい駅に行ったり人と触れることは少なくなりましたが地域に存在の存在のアピールをしています。古い学校の清掃のために子供たちに雑巾を小学校に200枚中学校に300枚地域の高齢者から眠っているタオルを呼びかけ集まったタオルで雑巾を縫いました。中学校や小学やボランティアさんとの交流も今も中止となっていますが、手紙のやり取りなどしながら繋がっています。外出なども大勢でいけない分、一人～二人ドライブ 散歩などに切り替え密にならずに地域で暮らすという支援を心がけています。今後は、コロナ禍でも、外で小中学校のお帰りのあいさつ運動を地域交流の一つとして考えています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

高齢者の『楽しく生きがいのある生活』を目標にした多機能複合型福祉施設の一環のグループホームである。地域に根ざしたホームの理念は開設以来受け継がれ、コロナ禍であっても地域との関係が途切れない活動をしている。昨年4月から小中一貫校が開設され、通学生への挨拶を始めたことがきっかけで、地域の挨拶運動に広がった。玄関先に箱を用意し、地域からタオルを頂いて雑巾を作り、学校にプレゼントした。生徒がいない時に学校の見学に行き、交流の再開を楽しみにしている。絵手紙の先生は下絵を描いて届けてくれ、お花の先生はホームの玄関に花を飾ってくれるなど、間接的な交流ができています。職員は『ゆっくり、あせらず、一緒に生きる』という理念に共感し、その人らしさを引き出しながら、ゆったりした時の流れに生きがいを感じると語っていた。職員は共通した理念を理解し、自然体で実践をしていた。***新型コロナウイルス感染予防の観点から、訪問調査は通常より時間を短縮し、簡潔に実施。**

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	地域の行事に参加したり自治会にも加入することで地域との連携を密にしたり、利用者が神社の参拝や近所に花を届けたり常に近所の商店に行ったりしているが、現在コロナ感染症により地域のボランティアの来苑や小中学校との交流が準備してできない状態である	グループホームの理念として『あせらず、ゆっくり、一緒に生きる』を掲げている。利用者と共にできる考え方が分かりやすく、職員も自然体で理念を実践している。理念の共有はまさに『一緒に生きる』の実践であり、地域の一員としての関わりも意味するところである。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の行事等や商店街に利用者様と一緒に参加している。広報誌を作成し地域の方へ認知症の理解を深める機会となっている地域のむけて介護者教室は蜜を避け少人数で行いました。近隣の小学校へ車いすの使い方の教室などもまた再開できたらと思っている。	地域の中での役割を継続するために、規模の縮小など感染対策をしながら交流を絶やさないようにしてきた。生け花教室の先生は、毎月お花を届けてくれて、コロナ禍でもお花との関係は途切れなかった。以前の様に地域の商店などに出向く準備はできている。電車通学の生徒が降りる駅に行って挨拶する事が地域の『挨拶運動』に広がった。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の行事等や商店街に利用者様と一緒に参加している。広報誌を作成し地域の方へ認知症の理解を深める機会となっている地域のむけて介護者教室は蜜を避け少人数で行いました。近隣の小学校へ車いすの使い方の教室などもまた再開できたらと思っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回会議を開催し、構成メンバーに、自治会長や民生委員の方に入っただき、地域の行事や取り組み情報を聞くことで参加させて頂いた利するが、現在は、行政からの指示で書面にてて推進会議を行っている。	行政からの指示で書面報告となっている。ホーム内の活動状況を細かく知らせる事で、対面での会議再開時、スムーズに移行できると考えている。ワクチン接種状況も記載し、家族にも同様の報告をしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	毎月市の相談派遣事業の方が来所したり、市の密着型サービスに運営に係る会議が定期開催されている。市の包括支援センターとの懇親会などがあり参加して他事業所との情報交換もできているが現在は行政の指示で書面にて提出している	コロナ禍で市の相談派遣事業所からの派遣や、地域密着型サービス運営に係る会議や他事業所との対面での情報交換は休止している。月初めに状況報告を高齢福祉課に送るなど、メールでのやり取りや書面での情報交換となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束をしないためにスタッフの人数をフロアに定着できる様に配置し安全に注意している。重度の方が多いためできるだけ2人介助4党で対応できるように配置している。	年間計画をして定期的な研修を行い、外部講師による研修も行っているが、オンラインで実施する事が多い。研修は拘束に当たるかもしれない行為について、職員自身が気づける機会でもある。拘束の疑似体験をして、体験後の感想を聞きまとめている。ユニット毎に委員会を設けて話し合い、研修は合同で行う。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることのないよう注意を払い、防止に努めている	県の研修や施設内研修において虐待防止について勉強している。スタッフの仕事への負担も人の配置により少なくしている。利用者のボディチェックも強化して見逃さないようにしている。施設内で虐待予防等の研修もzoom研修を取り入れている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を使っている利用者様が敷地内におり機関との連携も取れている。後見人の弁護士さんなどから聞く機会などを設け勉強している		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際に十分説明をしている。改正などがあるたびに個人・家族に文章と言葉での説明は必ず行っている。契約書 重要説明事項とともに説明し同意書頂いている		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	苦情処理ノートと苦情処理意見箱を設置、家族や外部の意見を頂けるようにしている。苦情処理体制に法人として第三者委員を設置している。日頃から食事会などの交流の場を開催しそのような時に意見を聴ける場を設けご意見や要望を聞けるようにしている。	家族との面会ができない分、ホームでの様子を3ヶ月に1回、家族に写真を同封してお便りを送る。家族からはお礼の言葉をもらい、利用者により関心を持ち、より目を向けてくれるようになった。職員の意識にも変化があり、コロナ禍だからこそ生まれたプラスの面と捉えている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定期的に全体会議やリーダー会議を開催し、運営の現状や対策の意見交換を行っている。各ユニットにユニットリーダーを置き常に職員の見解を取りまとめられるようにしている。会議はソーシャルディスタンスをとり換気気をつけている。	管理者は、ユニットリーダーの成長を実感している。離職率は低く、職員同士のチームワークが取れていて、利用者のケアにも反映されている。職員からは、管理者にいつでも気軽に相談ができて、適切なアドバイスをもらえるので安心できるとの話があった。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	定期的に労務士と給与体制や職場の環境の整備話し合いをしている。職員からも会議などで勤務体制などの希望を聞くようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	必ず研修会の参加を求め、研修後は復命を行い話し合う機会を設けている。外部講師による施設内研修を行い職員のケア技術向上も踏まえ研修を行っている。接遇や身体拘束などの研修も行っている。Zoom研修を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	通常であれば、お互いの事業所の方々と勉強会や懇親会を設けている。ひたちなか市の介護サービス連絡会に所属し定期的な研修会や活動に参加しているが、コロナ禍のためzoomによる懇親会や交流会などに参加している。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前の相談対応から本人やご家族から今までの生活状況や現在の状況などを必ず情報収集し職員間で共有し利用者の方や家族との信頼関係の構築に努めている		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所前の相談対応から本人やご家族から今までの生活状況や現在の状況などを必ず情報収集し職員間で共有し利用者の方や家族との信頼関係の構築に努めている		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所に当たっては、担当の介護支援専門員やご家族と入居前に密に話し合い、体験的なことから敷地内にある居宅系のサービス事業所と連携し利用者の情報収集に努め本人家族の要望も聞き対応するが、今回はコロナ禍の中書面で確認をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人や家族の意向を聞いて、本人や家族の立場でケアするように心がけている。理念にあるように共に生きることを考えています。家族支援も忘れずに話し合う機会を多くしているが今年度は、ラインや手紙などの配布により関係を築いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人や家族の意向を聞いて、本人や家族の立場でケアするように心がけている。理念にあるように共に生きることを考えています。家族支援も忘れずに話し合う機会を多くしているが今年度は、ラインや手紙などの配布により関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	友人や近所の方々の面会も奨励しており、出来るだけ家にいたような関係が維持できるようにしている。地域の方の入所が多いので地域に出かけることを多くして海岸や神社などに出かけ友人や近所の方と交流できる様にしている。人とは交流できないが近所へ散歩などに行くようにしている。	地域に出やすい立地で顔見知りも多く、一歩外に出るとどこに何があるか容易に思い出せる。地域密着型サービスの事業所として、近隣の環境に恵まれている。利用者もホームがある地域で育ち、暮らしていた人たちである。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の人柄や性格、認知症の程度その人の力を把握し、お互いに協力できるように役割なども決めていく。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	家族とは利用が終了しても続いているケースが多く、地域の中でも会話を持ったり、祖父が世話になったので今度祖母がというような関係が継続されている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	必ず本人の思いを聴きケアマネジメントすることにより、その人らしさを引き出すようにしている。日々の中で行動や言動表情を観察し、常に会話を多く持つことに心がけ本人の考えや思っていることを聞くようにしている。	マンツーマンの時は本音を聞けることが多く、環境によって引き出せるものは沢山あると捉えている。本人と向き合って話す事も大切である。集団よりも個別に関わった時のほうが思い出す事が多いとのこと。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	これまでの生活状況については、家族や本人または担当介護支援専門員等から情報を必ず聞いている		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個人個人の状況を把握できるように、資料を必ずサービス計画担当者に配布し、受け入れの段階で情報収集し、サービス計画担当者等含めカンファレンスし統一性を図っている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎朝、介護計画に基づいたミニカンファレンス行ってからケアに入っている。また定期的な月1回のカンファレンス行うことで介護計画に本人や家族の意見を反映させている。モニタリングは毎月行い職員間で共有している。	毎月、目標ごとのモニタリングを行い、6ヶ月毎にプランの見直しをする。担当職員が中心となって情報提供し、ケアマネと話し合って計画を作成。計画の共有・実践の為に、毎朝、ミニカンファレンスを行ってから一日が始まり、統一したケアに取り組む。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別計画記録にサービス計画書の実施経過が記入できる様に工夫されている。また職員間でも共有できる様に統一されている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人 家族の望む暮らしに近づく為に、例えば面会時間等も家族の時間に合わせたり、食事の時間もその人に合わせたり、利用者家族の意思の決定を重視し柔軟に支援できる様にしている		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の民生員や自治会ボランティアは常に交流している。小学校 中学校の慰問や体験などで交流している。定期的な生け花や絵手紙の教室もボランティアさんの協力で交流していたが、現在は、地域やボランティアさんからご遠慮されている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は協力的で、緊急時 24時間対応も可能であり、状態に合わせた往診もしてくれる。随時医師看護師等と連絡がとれるようになっている	医療機関との連携は密に取れ、常勤看護師にも相談できるため、状況に応じた対応が出来る。月2回の訪問診療で健康管理を行い、緊急時や夜間でもかかりつけ医の対応が可能で安心できる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	施設内に入る看護師は常に利用者の状態を把握しており相談指導等可能である。協力病院の看護師も連携良く24時間対応である		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	協力病院の連携も良く、状態に応じ入院した場合も認知症の症状が悪化しないように配慮されており、医療機関の関係者も情報交換に連絡をもらえるようになっている。在宅酸素療法などを導入している方もいるが医療機関との連携は良い。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	協力病院との連携は良く、往診の際職員との話し合いをしていただけるようになっていたため、医師の指示なども職員で共有できる。家族と医師も往診日に対応することで、医師から状態の変化や重度化、看取りなどの話も直接ホームで聞けるのでホームでできる最大のチームケアを伝えて実践しています。	コロナ禍の終末期の家族面会は、非常口からの出入りとし、他の利用者と接触しないようにしてもらった。終末期のケアには丁寧な説明が必要であり、医療機関も協力的。職員は常勤看護師と相談しながら、安心して看取りケアに取り組める。看取りケアでは医療的なケアと介護としてのケアの共通点と相違点がある事を感じている。お互いの立場を理解したうえでの介護を進めたいと感じている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアルを掲示してあり、緊急時も速やかに対応できるように備えている。救急法の研修にも参加職員が共有できるように全体で復命研修している。コロナ感染症のマニュアルやコロナに対する体制強化している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	自治会の会長を含め推進会議などで常に話し合っている。自治会にも所属しているので協力は得られる。消防署と連携し年2回防火訓練を行っている。地域の消防団と年1回防災訓練をしている、今年度は、施設内への入居を控え外での訓練のみとしている。	ハザードマップでは危険地帯には当たらない。防災マップ、指揮系統、役割分担などが明示され、7日分以上の備蓄がある。高台に立地している事と、防潮堤ができていたため津波の被害は回避できる。東日本大震災でも被害はなかった。地域柄、原子力災害避難計画がある。併設された鉄筋コンクリートのデイサービスセンターは避難場所として使える。	新型コロナウイルス感染も災害と捉え、生活の場面場面での危機管理を再度考える事で、より安心した暮らしが期待できる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員は権利擁護や個人情報保護などの研修も行い、利用者を理解した対応をしている。特に排泄や入浴のプライバシーを重視している。言葉に関しても名前を呼ぶときなど親しさばかりではなく尊厳性も含めて対応するように意識している。	それぞれの生きてきた背景を考慮した言葉遣いに配慮している。管理者は言葉遣いが不適切と気付いたらその都度注意し、言い方の例を示すようにしている。特に排泄・入浴は羞恥心を感じさせないような声掛けをする。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の意思を出来るだけ尊重し意思決定できる様に促している。例えば食事の選択や外出先や行事の参加なども必ず本人に聞きながら確認している。小さな意思決定の場に昨年よりバイキング食を取り入れ定期的に行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人のペースにあわせ一緒に考えながら行っている。本人の好きな場所や役割等も個別に確認して決定している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	タンスの入れ替えや季節に応じ行っている。地域にある理美容室に定期的な行っている。髪のカラーリングを希望される方もあるので付き添い対応している		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	職員と共に準備したり作ったりしている。誕生日やお月見など行事に合わせた食事作り行っている。誕生会の外食は個人が選択し行っている。昨年より管理栄養士の協力でバイキング食を取り入れ意思の選択に力を入れている。ケーキのバイキングは評判です。	厨房で一括購入し、調理したものをユニットに分けてから配膳。調査当日は、利用者の希望でラーメンが提供されていた。海鮮料理、刺身などの希望も多く取り入れている。バイキングは自己決定を促すいいチャンスであり、利用者からの評判も良い。食の楽しみは利用者共通の関心毎であり、管理栄養士と共に工夫をしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	管理栄養士からの指導も得られる為、病気や嚥下の問題などにも対応した食事が提供できる様になっている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	常に口腔ケアは行っている。状態に合わせて個別に行っている、例えば歯ブラシが使えなくても綿棒などで拭いたり状態に合わせたケアをしている。毎食後の歯磨きは生活の習慣になっている		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	認知症の進行に関係なく排泄はトイレで行うことを基本としている。オムツの方でもトイレで交換したりプライバシーの確保に努めて、トイレでの排泄を促している。	オムツ使用の方でもトイレで座ってもらい、その為に立ち上がり、立位保持できるようにする。「トイレ」の言葉を使わずに誘導する。立っしまえば歩き出し、そのままトイレに行っても抵抗はないことがほとんど。「〇〇さんトイレに行きましょう」の表現は避けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事のメニューを便秘症の方は繊維の物多くしたり、ヨーグルトやヤクルト等の整腸飲料を多くしたり工夫している。利用者も部屋に閉じこもらず外へ出るように働きかけている管理栄養士との相談も可能		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は週3回以上は入れるように準備している。利用者一人一人に合わせ確認しながら入浴を勧めている。ゆっくりその人のペースで入れるようにしている。	足からひざへお湯をかけ、温度に慣らしながら湯船に入る事で抵抗は避けられる。体を洗っている内に風呂を認識してくれる方もいる。入浴のこだわりでマイシャンプーを使用する方や、顔のマッサージを家族が希望する例もある。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	いつでも休息が取れるようになっている。休息をとるにあたっての環境としてソファなども設置してある。ベットのマットレスを無圧マットに変え安眠や褥瘡などの予防に努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者が服薬している薬に対してはすべて文献を個人のお薬手帳にはまとめて事務所にファイルされており、職員同士で共有できるようになっている		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事などを利用者の昔していたことが今もこれからも継続できるような環境づくりをしている。またその中で楽しみごとや役割を行えるように支援している。行きたい所などは利用者の意見を反映している		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出の機会は散歩などが週のうち2~3回以上あり、近所へ散策であったり、買い物であったり、利用者の状態にあわせて、考えながら出掛けるようにしている。定期的な外出やドライブは月間計画に毎月掲げている。コロナの中で全体での活動ではなく外出も個別対応を考えている。	近所の散歩では「見たことがある」「いった事がある」と利用者の記憶が引き出され、いろいろ語ってくれる。馴染みの神社や海への外出は特別な事ではなく、今まで生活環境そのものである。ドライブ、散歩は少人数で出かけるようにしている。コロナ禍で気づきとして、利用者から、今までより昔の話が多く聞いていると感じてる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物の財布が用意しており、買い物や出掛ける時は使用している。コロナ禍の中で買い物に行けないでいる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	絵手紙教室をボランティアにより開催している為作成したハガキを家族や友人に投函している。年賀状も必ず家族に絵手紙で送っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有スペースは馴染みのある置物などを設置楽しめる空間になっている。四季の草花や飾り物により季節を感じられるようにしている。食事の場所以外にソファなどでくつろげるスペースを設けている。時計やカレンダーの位置も見やすい位置に設置 トイレの表示もわかりやすくなっている。	有料老人ホーム改修した為、共有スペースのリビングは少し広すぎる感じがある。コロナ禍で十分なソーシャルディスタンスが取れるというメリットはあるが、まとまりという面では工夫が必要と捉えている。季節を感じる為の工夫や、時計やカレンダーは見やすいところに置き、メリハリのある暮らしに配慮している。利用者は余裕のある生活スペースの中で、ゆったりと過ごしていた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共有空間の中に畳やソファがあるためその人の過ごしやすい場所を選択し、過ごしやすくなっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は基本的に本人の持ち物や使っていた使っていたタンス等を持参していただくように声を掛けている。居室に草花や植木などおいて本人のらしさが表出できる様にしている。生け花や絵手紙教室の作品など自ら飾っている。殆どの利用者がいきり苑での生活が長く空間の全てが馴染みのものになっている方も多い。	家具は自宅から持ち込んだものもあるが、利用し始めてから買い揃えたものもある。絵手紙の作品や生け花がそれぞれの部屋に飾っており、それぞれの個性が感じられた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の出来ること 出来ないことを職員が把握することにより、利用者の力を認め、援助すべき所はプランに反映させ、個別的に声かけや誘導により混乱を避け安全に過ごせるようにしている		

(別紙4(2))

事業所名 : グループホームいきり苑Ⅱ

目標達成計画

作成年月日 : 2022年1月20日

目標達成計画は、自己評価及び外部評価結果をもとに職員一同で次のステップへ向けて取り組む目標について話し合います。
目標が一つも無かったり、逆に目標をたくさん掲げすぎて課題が焦点化できなくならないよう、事業所の現在のレベルに合わせた目標水準を考えながら、優先して取り組む具体的な計画を記入します。

【目標達成計画】					
優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1	35	ハザードマップでは危険地帯に当たらないが、災害における避難計画などの意識改革は常に必要である。コロナにおける感染も災害と捉え危機管理の意識改革が常に必要である。	災害に向けての意識改革とコロナ感染症におけるマニュアルは法人全体で昨年整備されたが、職員間で意識し、いざコロナ感染症が発症したときのシミュレーションまでされてないので、感染症への危機管理といざという時の訓練まで施行できる。	・災害時に於ける通報の仕方や災害が通勤時に起きた時など実践的に想定した訓練ができる。 ・コロナ感染症におけるマニュアルの研修会及び実践的に想定した訓練ができる。	12ヶ月
2	52	有料老人ホーム改修の施設のため、共有スペースリビングが少し広すぎるための空間利用についてまとまりという点で工夫が必要である。	空間スペースを利用者のまとまり方に合わせ空間整備できる。コロナ禍におけるソーシャルディスタンスをうまく取りながらかんがえていく。	コロナ化であるため、全てまとめずソーシャルディスタンスを保ちながら、調度品などで空間をまとめていく。	12ヶ月
3					ヶ月
4					ヶ月
5					ヶ月

注)項目の欄については、自己評価項目のNo.を記入して下さい。項目数が足りない場合は、行を挿入して下さい。